

遍路紀行文の言語表現に着目した景域構造分析

愛媛大学大学院 学生会員 ○亀田真宏

東京大学大学院 正会員 羽藤英二

愛媛大学大学院 フェロー 柏谷増男

1. はじめに

郊外型ロードサイドショップの林立や地域活性化、観光促進などの様々な文脈において、近年、地域の文化や風土に根ざした景観形成が重要視されている。ここで、俳句や絵画に代表されるように、仮に同一の景観であったとしても、その捉え方は十人十色、場合によっては一人十色にもなり得る。ゆえに、景観評価や設計においては、そのような景観の多面性を把握したり、視認した風景がどのように心的に構成されるのかを分析したりすることが重要となる。

そこで、本研究では、「景域」という考えに着目する。景域とは、人間の五感プラス心で認識する内外世界の総体と定義されるが、その構造は極めて複雑である。本稿では、景域が風景描写を含む文章に現れるものと考え、その言語表現の分析を通じて、景域構造を明らかにすることを試みる。

2. 分析手法

本研究では、風景描写を含む文章として紀行文に着目し、筆者独自の言語表現で描かれる「物語」そのものが景域であると考え、さらに、言語定量化手法であるテキストマイニングを用いて言語学的視点から分析を行う。ここで、言語とは、「物事に対する客観的な表現である指示表出(extensity)の中に必然的に自己表出(intensity)が含まれる構造」¹⁾をとるものとされており、図-1はこの2つの表現と品詞との関係を示したものである。この考え方によ

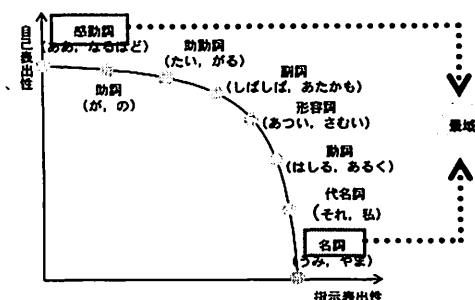


図-1 自己表出性・指示表出性と品詞の関係

れば、人間は、自己表出性と指示表出性を使い分けることで、物語の起伏を表現していると考えられる。

そこで本稿では、両表現の特性が最も顕著に現れる名詞と感動詞に着目し、そこから景域の構造を分析することにする。

3. データ概要

本研究では、四国遍路を歩いた巡礼者が感じたこと、体験したことを書き記した紀行文²⁾を分析対象とし、データは先行研究³⁾でデータ化したもののうち、特に高知-愛媛県間のデータを使用した。

4. 分析結果

(1) 基礎集計結果

名詞は客観性が高く、景域を形作る役割を担っているものと考えられる。そこで、まず一日毎の名詞の出現回数の推移を調べた。なお、名詞数は全体で26,216個、平均値は595.8個であった。図-2より、名詞の出現回数が平均値を超える日は、高知県で9/21日、愛媛県で14/25日となり、愛媛県は高知県に比べて風景を認識しやすい地域であることが分かる。

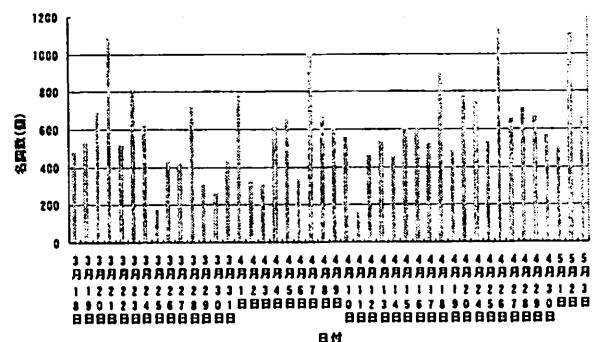


図-2 一日毎の名詞の出現回数の推移

次に、感動詞についても同様の分析を行った。ここで、図-1に示したように、感動詞は自己表出性が高いため、個人が印象を受けたものに対して発露した感情の度合いを示す指標として捉えることができる。感動詞の総出現数は74個、平均値は1.7個

であり、図-3より、平均値を超えた日は高知県で9/21日、愛媛県で11/25日となった。特に高知県では出現回数にばらつきが多く、感情の出方が局所的である。また、3月19日～21日の室戸岬、4月4日～5日の足摺岬で高い感情が現れている。一方、愛媛県は比較的緩やかで、継続的に感情が現れていることが分かる。

以下では、強い感情の発露が確認され、かつ岬という共通点を持つ高知県の室戸岬、足摺岬に着目して景域の構造を分析する。

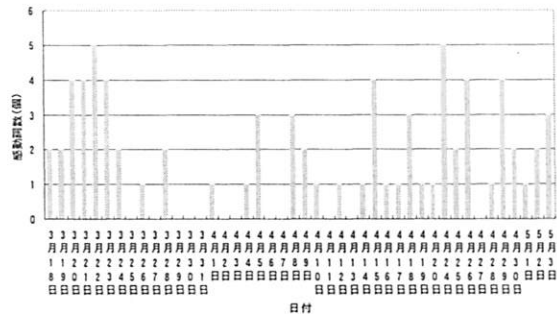


図-3 一日毎の感動詞の出現回数の推移

(2) 景域に対する非集計分析

紀行文から該当地域について書かれている文章を抜き出し、筆者がどういった活動を行い、どのような感情を発露したのかをシーン毎に分類する。

(a) 室戸岬の景域

シーン分類を行った結果、室戸岬では、民宿と遍路道から「海」を眺めているシーンが確認できた。そして、民宿から眺望する「海」のシーンでは、喜びの中でも幸福感、感動という感情が発露され、遍路道では安らぎという感情が見られた。このことから同じ海でもシーンによって感情に相違が生まれることが分かる。そこで、各シーンの構成要素を把握するために、シーン毎に名詞を抽出した。図-4から、民宿から眺望するシーンでは、海や空に関する単語の頻度が高い。一方、遍路道では海に関連す

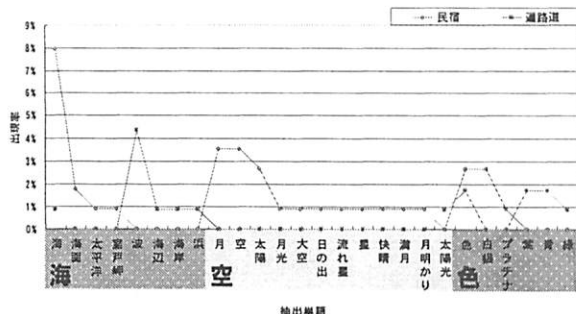


図-4 名詞の出現率の推移（室戸岬）

る名詞の出現率が高い点では共通しているが、波という海の様子に目を向けている点に特徴がある。また、両者共に海を色で表現する傾向が強いことから、室戸岬には、空や海に五感を引き付けるような効果があるものと考えられる。

(b) 足摺岬の景域

足摺岬では、民宿、札所、展望台のそれぞれの地点から海を眺望しているシーンが見られた。特に、民宿から眺望するシーンでは、室戸岬と同様、海と空についての描写がなされていたものの、発露された感情は活力や安らぎといったものであり、同じシーンでも景域に相違があることが確認された。

次に、各シーンを構成する名詞に着目すると（図-5）、札所からの眺望については、足摺岬での記述にも関わらず、室戸岬や室戸という単語が多く現れている。これは足摺岬の景域が室戸岬との対比によって構成されていることを示している。また、いずれのシーンについても室戸岬と比較して色の描写が少なくなっていることから、過去の経験が感情の薄れ等を引き起こし、景域を変化させているものと推測される。

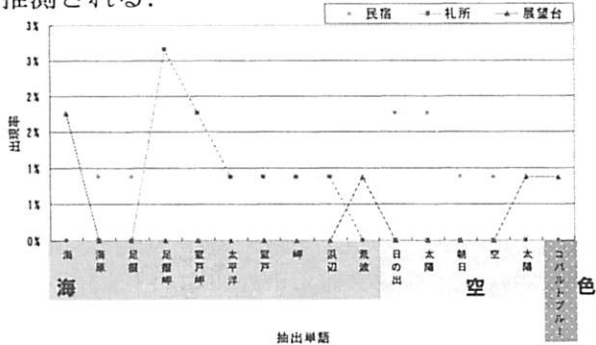


図-5 名詞の出現率の推移（足摺岬）

5. おわりに

本稿は言語表現に着目して景域構造の分析を試みた。現時点では1つの紀行文のみを取り上げたに過ぎず、また、分析自体も途上段階にあるが、昨今ではブログなどの形で風景描写を含む文章が膨大に蓄積されてきており、今後同様の分析を行うことで景域構造の理解が急速に進むものと期待される。

参考文献

- 1) 吉本隆明:言語にとって美とはなにか、勁草書房、1965.
- 2) 細谷昌子:詩国へんろ記-八十八か所ひとり歩き七十三日の全記録-, 新評論、1999.
- 3) 長和剛平:文章表現に着目した遍路空間の景域構造分析、景観デザイン研究発表会、2008.